慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	G・ルカーチ著、城松登ー松敬三訳 実存主義かマルクス主義か
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.3 (1955. 3) ,p.249(65)- 252(68)
JaLC DOI	10.14991/001.19550301-0065
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550301-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

繁榮を示していた。スダンの新教徒は全市の織機の半數以上を所有し、「最も富裕な住民」として重視されていた。毛織物工業の他の中心地についていえば、例えばアヴヴィル、エルブーフ、ルーヴィエルにおいて新教徒の進出が特に顯著であつた。またツール、リヨンの絹工業、ナント、ランヌ、ヴィートレの麻工業、オーヴェルニユ、アングモワの製紙業についても新教徒の盛んな進出を確認することが出來る。リヨンにおいては新教徒を中心に印刷業が發達していた。

最後に、その金融業について。特にリヨンに在住したスイス國籍の新教徒は金融業者として著名であつた。パリ有數の銀行家は悉くユグノー教徒であつた。また新教徒で國家財政に介入する者も多く、シュリー、ルイ十三世、マザラン、コルベールの時代を通じて政府財政の重要な職務は新教徒の獨占するところであつたといつても過言ではない。

かかる事實からユグノー教徒がフランス社會のなかで重大な地位を占めていたと斷定することは困難であろう。ユグノー教徒の活躍に旅行者や役人が多大の關心を寄せ、從つて史料のなかでユグノー教徒の名前や事蹟が最も頻繁に現われる可能性が大であつたと考えられるから、殘存する記錄は「信頼し得る實態を示さない」としなければならない。しかしスコヴィル氏によれば、ユグノー教徒の活躍を示すこれらの史實は、「ユグノー教徒がフランス經濟の發展に對しその人口に不釣合な影響を與えていたという見解を十分に支持する」ものであつた。少數者の割にその影響力が大であつたとスコヴィル氏は考えるのである。

三

當時、「新教徒は數の上で國民の僅か十分の一に過ぎなかつたけれども、その富や勤勉から判斷すれば、少なくとも全體の八分の一を占めていたことは確實である。二百萬の新教徒は三百萬の舊教徒に相當する」といわれ、とにかく第十七世紀の後半から第十八世紀の前半にかけてユグノー教徒はフランス經濟のなかで重大な影響力を持つていたのであつた。何故ユグノー教徒は經濟的に成功することが出來たか、宗教と經濟的進出との關係は偶然に過ぎないのか、それとも合理的な根據を持つのか。スコヴィル氏はこの問題について如何に説明しているだろうか。

もとよりスコヴィル氏は、新教の倫理とフランスにおけるユグノー教徒の經濟的成功との間に直接或いは間接の因果關係が存在することを認めようとしないのではない。スコヴィル氏にとつて、ユグノー教徒の經濟的進出を可能にした理由は、むしろほかにあつた。そしてこの方がより重要であつた。かかる理由の第一のものとしてスコヴィル氏は、ユグノー教徒がフランス社會のなかで差別待遇を受けていたという事實を擧げている。ナント勅令によつてすべてのユグノー教徒はあらゆる專門職・公職・營利活動に參加することを認められたが、裁判官・高級軍人・行政官になることは第十七世紀を通じて徐々に制限されるようになつた。一六六四年にルイ十四世は、ユグノー教徒に對して許された職業の範圍を極端に制限している。またナント勅令が廢止された一六八五年以來、ユグノー教徒は非常に限られた職業にしか從事することが出來なくなり、このため一部のユグノー教徒は亡命を餘儀なくされた。かかる差別待遇は、スコヴィル氏によれば、個人や集團の行動に對し非常に有力な刺戟を與えるものであつた。ユグノー教徒はかかる抑壓のためにその全精力を、僅かに許された商業・工業・銀行業に傾倒するようになつたのであり、かくてフランス社會のなかで重大な經

濟的勢力を形成するにいたつたとスコヴィル氏は考えるのである。「異教は營利心を助長する」。

ユグノー教徒が經濟的に進出し得た理由の第二は、スコヴィル氏によれば、ユグノー教徒は財産を獲得して後も依然として商工業に從事し續けたことである。當時、「誰もユグノー教徒を、・・・自由な職業である商工業から誘惑することが出來なかつた」といわれ、商工業が財産を得て貴族になろうとした舊教徒の態度と全く相違していた。ユグノー教徒は商工業に從事し、商工業を自分等の「考察の唯一の對象」と感じていた程であつた。もとよりユグノー教徒のかかる態度が、經濟活動以外に生きる道を絶たれていたという時代的環境から大きく影響されたことはいうまでもない。

理由の第三のものとしてスコヴィル氏は、他國の商人が好んでユグノー教徒と取引關係を結んだ點を擧げている。特に新教國の商人はフランスのユグノー教徒のみを取引の對象として選び、このためボルドー、ラ・ロシェル、ナント、ルアンの舊教徒は外國貿易から締出され、甚だ不滿であつた。またユグノー教徒の商人はその息子をヂェネヴァ、イングランド、オランダその他に送り、代理商人として活躍させ、かたわら商業上の新技術を習得させていた。工業上の新技術を海外に學ぶことにおいてもユグノー教徒は極めて積極的であつた。從つてフランスでいち早く新技術を採用することが出來たのはユグノー教徒であり、この意味でも經濟的進出を容易に達成し得る條件は十分に備わつていたのであつた。

四

既に明らかな如く、嚴重な就業の制限からユグノー教徒は商工業に向うことを餘儀なくされ、商工業に專從して顯著な經濟的進出を示していた。しかしスコヴィル氏はこの論文で、ユグノー教徒の經濟進出の事實を指摘し、そしてこれを可能にした理由について言及したに止まり、ユグノー教徒の盛んな進出がフランス經濟全體のなかで如何なる意味を持つものであつたかについての詳細な説明は次の機會に讓つている。ただスコヴィル氏は、ユグノー教徒がフランス經濟のなかで占めた地位が如何に大であつたかについて、ナント勅令の廢止によるユグノー教徒の亡命を直接の契機として若干の都市で深刻な經濟不安が起つたことを指摘するに過ぎない。特に織物都市サン・カンタンにおいて混亂が甚だしく、「最も富裕な住民」の亡命で稅收入は激減したといわれた程であつた。多くので記錄はサン・カンタンについてその慘狀を詳細に傳えている。（渡邊　國廣）

G・ルカーチ著、城松登一松敬三譯『實存主義かマルクス主義か』

周知のように、ジェルジ・ルカーチ（Georges Lukacs）は現代のすぐれたマルクス主義思想家である。ハンガリヤの首府ブダペストに生れて、ドイツの大學でヘーゲル哲學を專攻した彼は、哲學者でありながら同時にすぐれた文學評論家でもあることは、たとえばバルザック論、スタンダール論、ゾラ論、ドイツ文學小史、ゲーテとその時代、若きヘーゲルなどの著書によつても明らかであろう。それゆえ「實存主義か、マルクス主義か」と題する本書では、著者のマルクス主義思想への深い理解と文學的な教養とによつて實存主義に對する內在的批判が試みられている。彼の思想は深く、ひとおりの通讀では容易に理解しがたい點もあり、本書の全般にわつて紹介と批評をすることはむづかしいので、ここではただ、マルクス主義思想家としてのルカーチが、現代のインテリゲンチヤの間に問題となつ

ている實存主義について、どのように批判しているかについてふれることとする。

今日、われわれは實存主義という言葉を實によくきくことができる。それほどわれわれに親しみ深いものになつているにもかかわらず、その實體について果してよく知つていると云えるだろうか。實存主義はしばしば「不安の哲學」と呼ばれるが、要するにそれは資本制社會の發展と高度化、すなわち前世紀の末期以來、爛熟した資本主義が帝國主義的段階に到達して以來、これに對して最も敏感に反應した知識層の絶望と苦悶、そしてやるせない不安というものを反影した思想であると云えるだろうか。資本制社會は、その發展の必然的結果として、階級の分化をおしすすめ、知識層の地盤である中産階級を、益々プロレタリア化の方向におとしいれようとする。實存主義をもふくめていわゆる『不安の哲學』は、これらのいわゆる知識層の思想的な動搖と分裂の結果生れ出たものであり、またこの危機を意識したインテリゲンチャが、新しい世界觀の必要を痛感し、みづから、その陣營を建てなおそうとする努力の産物にほかならない。およそこのような傾向はすでに第一次大戰前に見られたところである。「多くの哲學は一九一四年よりずつと以前に、いちはやくそうした前兆を示している。そうした前兆がその頃までは全く抽象的なものであることは、當然のことである。さしあたりは、資本主義的分業によつて産み出された解決不可能な矛盾を、とやかくのべたてることだけにかぎられている。」（一九頁）すなわち、ルカーチによれば、「古典的時期の哲學は、科學的認識という旗じるしのもとに世界觀の問題を提起した。換言すればその世界觀は科學の世界觀であつた。過渡期の哲學は、もろもろの特範科學によつてえられた認識の終るところに越えがたい限界線を引いた。帝國主義の哲學はこの限界線を承認しはするが、認識の新しい道具である直觀によつて、超科學的あるいは反科學的な新しい世界を創出しようと意圖しているのである」と。（三二頁、傍點筆者）云いかえれば實存主義の萠芽期のそしてまた先驅的な型態は、ショーペンハウアー、キェルケゴールならびに哲學的ロマン主義のなかに見出されるのであつて、ディルタイは新しい時期への過渡に立つ人物であり、ニーチェ、ベルグゾン、シュペングラー、クラーゲスに至つて、それは益々相對主義的不可知論への傾向を強めてゆく。その懐疑的な態度は反理性主義すなわち非合理主義を容認し、やがてハイデッガーを通つてファシズムの惡魔的なヴィジョンに到達したというのである。（三二頁―三三頁）ともあれ實存主義の獨創性は一體どこにあるのだろうか。それがやがてファシズムへの道を開いたものであるという點は別としても、たしかにつぎのように言うことができよう。つまり實存主義はフッサールの現象學的方法から影響をうけて思想上の「第三の道」を歩み、直觀をあらゆる認識の源泉とすることによつて、觀念論をも唯物論をも克服しようとするところの方法の一つであることが明らかである。「觀念論と唯物論のほかに、『第三の道』なるものが存在するであろうか？　若干の現代思想家たちの空虛な文句を無視して、この問題を眞面目に、過去の偉大な哲學の精神に則して考察する人々にとつては、解答はただ否定的でしかあり得ない。事實、可能性は二つしかない。意識に對する存在の優位（觀念論）か、それとも逆に存在に對する意識の優位（唯物論）か、のいずれかである。『第三の道』へと向う流行の哲學體系は通例、意識と存在の相關關係を設定し、一方は他方なしには存在しえないと主張する。かような主張によつて、彼らは觀念論を戸口から追いだしておきながら、ふたたびそれを窓からひきいれることに成功する。というのは、存在が意識なしには

存在しえないことを容認することによつて、存在は意識から獨立であるとする唯物論を拋棄するのだからである」と。（四六―四頁）。

ルカーチは以上のような實存主義の方法についてふれているが、さきにのべたように、この哲學の地盤としてブルジョア社會の危機は、すでに多く思想家、作家たちによつて豫知されていた。「資本主義社會の土壤がゆるがぬものと思われていた間は、すなわち第一次世界大戰の直前の時期までは、ブルジョア的知性の前衞は、物神化された內面性の一種の常住的な謝肉祭（カーニバル）の中に生きていた。もちろん偉大な作家は一人ならず避けがたい破局をはつきりと豫見していた。イプセン、トルストイ、トマス・マン、その他多くの作家を考えてみるがよい。このまばゆいばかりの謝肉祭は、人々がしばしば悲痛なこだまをそこに聞いたとしても、不可抗的な魅力をもつていた。ジンメルの哲學、ベルグゾンの哲學、この期の文學の大部分を見れば、わたくしのいわんとすることは明瞭になる」と云うのである（五九頁）。第一次世界大戰と、それに續く一連の危機が、人間存在のあらゆる可能性を疑わしくさせたとき、この偉大な變革のなかに、ハイデッガー、ヤスペルスの實存主義は、虛無をもつて、人間的現實の本質と規定しながら登場したのである。「實存主義は、人間については何事をも知ることができないのだということを、あくまでも徹底的に敎えようとする。實存主義が科學一般を否定するというのではない。實存主義は科學的知識の實用的價値を認める。ところが實存主義は、人間と生存の間の現實的關係という唯一の重要な問題については、どんな科學も本質的知識に到達する權利がないと云うのである」と。（六五頁）

ここにおいてわれわれは、非合理主義としての實存主義は、實はニヒリズムそのものにほかならぬことを知るであろう。すなわち、「實存主義によれば、實存とは人間的―現實に缺けているものなのである……ハイデッガーによれば、『ひと』の日常生活におけるさまざまな發現はお喋り、好奇心、曖昧、頽落である。自己本來の生を生きんとする者は、ハイデッガーによれば、自己本來の死のために生きるべきである。すなわち、死が己れの實存に對して不意に襲いかかる破壞なのではなく、むしろ『自己本來の死』であるというふうに生きなければならない。その名に價する實存は、ハイデッガーにとつては、この自己本來の死のうちにのみ、眞の完成を見出すのである。（六六―六八頁）しかしながら、實存主義者としてのハイデッガーとサルトルとを比べると、これはまことに對照的である。たんにサルトルがフランス人であり、ハイデッガーがドイツ人であるという相違だけでなく、ルカーチも云うように、「ハイデッガーの基礎的著述は一九二七年、ファシズム出現の前夜、動亂に先立つ息苦しい雰圍氣の中にあらわれた……J・P・サルトルの著書がいつ書かれたかは分らないが、その出版の年一九四三年は、すでにファシズムの崩壞を豫言することができるようになつた時期、さらに――あまりにも永く壓制が續いたという、まさにその理由から――自由への願望をヨーロッパの、とりわけ古い民主主義の傳統をもつた國々の知識人が、もつとも強く、深く體驗した時期にあたつている」からである。（七〇―七一頁）

以上において、ルカーチの實存主義に對する批判の一節を紹介したが、要するに、實存主義は、たんに死の哲學であるばかりでなくまた絶對的自由の哲學でもある。たとえばハイデッガーの思想は、實存主義における「死の哲學」を代表するとすれば、サルトルの思想は「絶對的自由の哲學」を代表する。そしてここに實は實存主義の反動的側面と進歩的側面とがある。か

つてファシズムの精神的支柱となつた實存主義が、第二次大戰後、進歩的なインテリゲンチャの間に非常な人氣を博するようになつたのは何故か？　それは主としてハイデッガーのペシミズム的な考え方とサルトルの個人主義的な考え方の相違に歸せられるかもしれない。だが果してそれのみであろうか。ともあれ、ルカーチはこの書において、實存主義におけるファッショ的もしくは反ファッショ的傾向が、どのようなものであるかをくわしく説明してくれる。

（飯田　鼎）

（岩波現代叢書、三〇一頁、一九五三年七月一〇日、二八〇圓）

R・ヌルクセ

『未開發諸國における資本形成の問題』

Ragnar Nurkse, Problems of Capital Formation in Underdeveloped Countries. New York. 1953.

本書はヌルクセが一九五一年の夏、リオデジャネイロでブラジル經濟研究所客員として行つた六つの講義から編集したものである。從來、後進國開發に關する優れた論文はいくつかあるが、著者が最近殊に國際經濟の分析においてめだつた勞作を發表して來ただけに好著の一つとして充分な内容をもつている。

まず序説で所謂「未開發地域」Underdeveloped areas を人口と自然的資源に相應する資本が不足しているものとして、開發乃至發展の問題の中心を資本形成に見出す・第一章はこの資本需要を決定する條件が扱はれ、貧困の惡循環がここにも存在するという。即ち投資の誘引が低いのは購買力が小なるためであるが、それは實質所得の低さの結果で、生産性の低いことによる。しかし生産性が低いのは生産に用いられる資本量が小なるためであり、結局は資本誘引の低さによるという惡循環になつてしまう。これについても市場の大きさが勿論關係をもつが、更に均衡のとれた成長こそこのゆきずまりを打開するといいべよう。けだし、それは市場の擴大、生産性增大の基本的條件だからである（p. 21）しかし殘念ながら、未開發の私的資本にはその力がない。しかも傳統的外國資本投下のタイプはその條件をみたすものではなかつた。（pp. 24—30）かくして、彼は資本需要に關して、私的資本の限界生産力と社會的なそれとのギャップを埋めることが必要であり、（p. 30）そこに公共投資のあり方と機能が求められるとする。第二章では資本形成の國内の潛在的源泉としての人口をとりあげ、人口過剰國と人口稀薄國の二つのタイプ等々について檢討する。前者では過剰人口を積極的に利用することにより、後者では農業の技術的改善をすることによつて總産出高の增加が可能である。即ち前者は限界生産力が低いのだから、その人口を他の經濟活動にふりむけても、その産出高は減少しない。換言すれば、同部門の産出高を減少せじめることなしに人口を動かし得る。（p. 32）後者は技術的改善をなくしては産出高減少は必須となる。從つて人口過剰國では過剰人口そのものの移動が、人口稀薄國では農業部門の技術の改善→生産力增加が夫々資本形成の條件をなすというのである。（p. 54）

しからば次に未開發國の貯蓄能力如何。これが第三章で扱はれるが、殊にこの問題が未開發國の所得分析に興味深い内容をもつている部分といい得る。まず彼の論旨はこうである。(1)貯蓄能力を決定するものは實質所得の絶對的水準のみならずその相對的水準である。（p. 57）(2)個人の消費函數は獨立ではなく、デモンストレーション効果を考慮しなければならない。（p. 58, 61）(1)は極貧國と所得の絶對的水準が增大しても、貯蓄が容易になるとはかぎらず、先進國と比較してその所得の相對的水準が低下するならば、一般消費性間が上昇せしめ、貯蓄が愈々困難となるし、國際收支を壓迫することがあり得るという意味である。（p. 57—58）(2)はこれをまさに決定的として一層著しいものとする。事實南米諸國では、これは重大な要因をなしている。（p. 65）從つて、前述したような惡循環の一部をなす「低所得水準→低貯蓄率」は(1)のような國際間の所得差の擴大にもよるとみなければならない。即ち先進國の高所得・消費水準こそ未開發國の投本形成の國内手段をせばむる傾向をもたらしているといい得る。（pp. 67—68）しからば、先進國の消費水準が未開發國にとりデモンストレーション効果を通ずる發展へのハンデキャップをなすに對し、いかなる解決策が考えられるか。彼はそこに經濟的孤立政策をかかげる。（p. 75）しかしそれはたとえソ連や日本において効果を示したとはいえ、その犠牲は著るしいものであり、敗戰主義的解決方法にすぎない。（pp. 76—77）かくして先進國からの所得移轉外資導入の問題が登場する。勿論それは低所得國の國際收支のギャンプを埋めるかも知れないが、デモンストレーション要因の作用というハンディキャップを相殺出來るかどうか、これが第四章を通じて檢討される外資導入の在り方に結びつけられてゆく。（pp. 77—81）

これは三つの部分から述べられる、第一は直接企業投資、第二は政府借款と贈與、第三は交易條件のそれぞれの効果である。この章の要點は、右の未開發國における(1)(2)の事實から、外資導入が無條件に資本形成に寄與するという樂觀をいましめ、交易條件の有利化にしても、それが潛在失業を移轉せしめるか農業方法の改善による勞働の解放使用と同じ効果があるとはいへ、必らずしも資本形成に役立つものではなく、消費抑制こそこの必要な條件をなすというにある。（p. 103）

最後に保護關税や輸入制限を中心とする貿易政策の効果を資本形成の觀點から檢討しているが、（第五章）前者に對しては幼稚産業保護は資本供給の問題を看過しているものであり、たとえば特殊産業の育成をもたらすことに基く疑問が殘るし、地方貯蓄率の增大を招來しないであろう。（p. 106）むしろ現代未開發國がおかれている條件下では保護關税は用いて効果の極めて小なものであると共に資本形成の上からは完全に第二義的な意味しかもち得ない。（p. 109）後者に關しては特に消費財輸入制限をとりあげ、これは一方において資本財輸入の增大を可能にし資本形成に役立つが、もし他方、國内市場での消費支出を增加せしめるとすれば、その分だけ投資財生産の縮少をもたらし、右の効果は相殺されてしまうであろう。即ち、貯蓄が增加しているかぎり、純資本形成の增進はあり得ない。（p. 114）贅澤品輸入制限の場合も同樣である。ただこれは先進國の消費のパターンがもつ未開發國へのデモンストレーション効果を小とする意味は認められる。しかし問題の焦點はこれが貯蓄の增加に裏ずけられるかどうかである。（p. 119）

以下二章に國際資本移動論の展展や本論の補遺的敍述が集錄されているが、もはや紹介の要はあるまい。おそらく本書を通讀した者は、これが後進國の所得支出の循環構造が國際經濟の場において綜合的に把へ、從來の所得分析の範圍を一層擴張し具體化し、しかも生活構造という實體をこれに結びつけて量的分析の缺陷を補いつつあることを知るであろう。その意味で、本書の中心は第三章にある。ただデモンストレーション効果を展開する箇所は未だ充分とはいい得ない。これを未開發諸國の所得—支出の循環構造に適用する際には、その消費のパターンに關する詳細な分析が必要であり、一般的な消費性向と貯蓄性向を對照的に扱うだけではこの原理を有効に用い得ないであろう。所得增加の過程におけるデモンストレーション効果の變化